奈文研ニュース

No.24 Mar.2007

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp/

高松塚古墳の発掘調査

平成18年10月から国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に伴う発掘調査を実施しています。この調査は劣化が進行する壁画の修理に向けて、石室を解体して墳丘から取り出すために実施するものですが、同時に、壁画の保存環境の劣化原因や古墳の築成方法の解明を目的としています。文化庁の委託事業で、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で調査を進めています。

高松塚古墳の墳丘は、平成16年度に実施した発掘調査によって、下段部の直径が23m、上段部の直径17.7mの二段築成の円墳であることが判明しています。今回の調査は、特別史跡である古墳の掘削を最小限にとどめ、かつ作業の安全性を確保するために、上段調査区（南北7.2m、東西６m、深さ2.7m）、下段調査区（南北5.2m、東西４m、深さ2.5m）の二段掘りとしました。昨年末までに上段調査区の調査を終え、現在、石室と同じ温湿度に調節した断熱覆屋内で下段調査区の調査を進めています。

墳丘は、土を層状につき固めた版築で築かれています。薄く敷いた粘土を、搗（つ）き棒（杵）でつき固めながら積み重ねたもので、墳丘の断面はバウムクーヘンのような縞状に見えます。１層の厚さは３～５cm前後で、版築は100層以上におよびます。今回の調査成果として興味深い点は、墳丘の下半部の版築層からムシロ目状の痕跡が何層にもわたって確認できたことです。これは斜面に版築を施す際に、ムシロと土の摩擦力や噛み合わせを利用して盛土を安定させるための工法とみられ、ムシロを敷きながら版築を繰り返したものと考えられます。版築層の上面では、径４cm前後の搗き棒（杵）の痕跡も多数確認できました。

石室を覆う白色の版築

また墳丘の版築層を掘り下げていく過程で、版築層をつき破る多数の地割れや亀裂が見つかりました。奈良盆地南部を90～150年周期で襲うマグニチュード８クラスの巨大地震、「南海・東南海地震」の痕跡と考えられます。

高松塚が西暦700年前後に築かれて以降、南海地震だけでも、887年、1099年、13世紀初頭、1361年、1498年、1605年、1707年、1854年、1946年に発生したことが知られています。石室の天井石や床石に見られる亀裂も、こうした巨大地震による損傷である可能性が高まりました。亀裂は雨水が浸透する水みちにもなっており、地震による墳丘や石室の損傷が、壁画の保存環境に重大な影響を及ぼした様子も明らかになってきました。

調査では、墳丘断面の土層転写や版築層の切り取り、地震痕跡の型取り、３Ｄ・写真測量、ビデオ撮影など、さまざまな手法を駆使して情報の記録や保存に努めています。

現在進行中の下段調査区の発掘では、墳頂下2.3mで土饅頭状に顔を出した白色粘土の版築層を掘り下げています。この版築層は石室の組み立てと一連に施されたもので、墳丘の版築層と比較すると２倍近い硬さがあり、石室を厳重に保護しています。３月初めには石室が顔を出す予定で、石室の解体修理に伴う発掘調査はいよいよ山場を迎えます。

（都城発掘調査部　松村 恵司・廣瀬 覚）

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第146次）

「ガチッ」。調査を開始して４ヶ月を過ぎ、記者発表を10日後に控えた寒い日でした。柱穴の検出も一段落し、調査区の一部を掘り下げて下層の調査を開始した矢先。スコップの先に大きな石が当たりました。石は一つではありません。上下に何段も重なり、南北方向に連なっていきます。調査員の間に、驚きと期待が広がりました。甘樫丘の石垣が、1300年以上の長い眠りから目を覚ました瞬間でした。

甘樫丘は、飛鳥を一望する丘陵で、現在は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区として整備されています。丘の東麓に位置する約6000㎡の谷地では、これまでの調査で、７世紀中頃の焼土層と炭化した木材や焼けた壁土などの遺物、７世紀代の建物跡と大規模な整地を確認しており、乙巳（いっし）の変（大化の改新）で滅びた蘇我邸との関係が注目されていました。

そこで、2006年10月から谷の東奥を発掘調査し、７世紀代の大規模な整地と建物群を確認しました。遺構の時期は大きく３時期に分かれます。もともと、調査区内の自然地形は、中央に谷筋が南北に入り、東と西が高い傾斜地となっていました。

７世紀の前半には、谷筋の東半を埋め立てて石垣を築き、東側に一段高い平坦面を造成しました。石垣上の敷地には、建物や塀を建てています。石垣は、裏込めの石などを入れずに積み上げた、古墳の石積などと共通する技法で築かれています。

７世紀の中頃には、敷地の段差と石垣を覆うように土を盛り、谷筋を完全に埋め立てて平坦地をつくりました。この平坦地には建物や塀が建てられます。特に注目されるのが、２棟の総柱建物です。これらは、倉庫や高床建物と思われます。『日本書紀』には蘇我邸に武器庫があったという記述がありますが、残念ながら調査区内では、用途を特定できるような遺物は出土しませんでした。また、調査区の東側では、２段の雛段状に広がる石敷も確認しました。

７世紀末の藤原宮の時代には、再び整地をおこないました。Ｌ字形に溝を掘り、東外側の山側には炉を設けます。炉は４基を確認しました。隅丸長方形の炉には、炉の内部に空気を送り込むための送風口が残っていました。

このように７世紀の土地利用が明らかになってきましたが、７世紀前半と中頃の２度にわたる大規模な整地作業は特に注目されます。整地には多大な労力が必要で、いずれかの整地が蘇我邸の造成にともなう可能性も考えられます。ただし、他の有力者や組織による造成の可能性も否定できません。

ただし、敷地造成のダイナミックさと比べ、今回検出した建物遺構はいずれも中小規模でした。敷地の中核となる建物は、これまでの調査区外に展開しているものと思われます。また、谷の裾野の調査時に出土した、焼けた壁土に関わる焼失建物も、今回の調査範囲では確認されませんでした。今後も継続して調査をおこない、遺跡の全容を明らかにする必要があるでしょう。

今回の調査成果は、新聞やテレビなどでも大きく取り上げられました。２月11日の現地見学会には全国から5000人を超える見学者が訪れ、多くの感動の声をいただきました。地元の皆様、関係諸機関の皆様のご協力にも感謝いたします。

（都城発掘調査部　西田 紀子）

調査区全景（南から　中央に石垣がみえる）

藤原宮期の炉（南から　手前が送風口）

平城宮東院地区の調査（平城第401次）

10月から12月にかけて、平城宮の東端に位置する東院地区を発掘しました。調査場所は、現在復原公開されている東院庭園駐車場のすぐ北側になります。

今回の調査では、掘立柱建物、掘立柱塀、石組溝といったさまざまな遺構を確認しました。これらの建物の柱穴はいくつも重なり合って見つかったので、奈良時代の約70年の間に建物が頻繁に建て替えられていることがわかりました。

なかでも、奈良時代前半と後半では掘立柱塀が大きく建て替えられていることは注目されます。塀は土地を区画するための構造物なので、塀の変遷が明らかになるということは、その土地の利用の仕方がわかることにもなるのです。すなわち、奈良時代前半では東院内部の西半部をさらに二つに分割していたのに対して、奈良時代後半には東院の中枢部分を含む中心部分をひとつの区画として広く利用していた状況が考えられます。平城宮内でもこのような大きな区画の変化はあまり見られません。想像力を膨らませると、767年に新成する宮殿である「玉殿」との関係も垣間見えてくるでしょうか。

今回確認した建物は決して大きくはありませんが、なかには桁行14間以上×梁行２間の南北に長大な掘立柱建物も見つかっています。このような長い建物は一般的に脇殿や回廊とされることが多いのですが、残念ながら今回の調査ではこの建物の性格を明らかにすることはできませんでした。

多くの石組溝が確認されたことも興味深いことのひとつです。南へ水を流すための石組溝はほぼ同じ位置で造り替えられており、これも奈良時代後半の大きな改変を伝える一例と言えるでしょう。

調査区全景（北から）

下層調査の様子（北から）

また、二彩の土器、緑釉の瓦や磚が出土しました。瑠璃瓦葺きの「玉殿」があった東院地区に相応しい遺物と言えるかもしれません。これらはなかなか見応えのある遺物ですので、平城宮資料館での展示の機会には是非お越しください。

12月９日（土）には現地説明会をおこないました。あいにくの雨模様にもかかわらず、約450人もの方々にお越しいただきました。あらためて、感謝申し上げます。

今年度から、東院地区の調査は毎年継続的におこなっていく予定です。東院地区はまだまだ未解明な部分も多く、調査が進むごとに新たな展開を迎えるとともに、これまでの調査の見直しも必要になってくることでしょう。今後の調査・研究の進展に是非ともご期待ください。

（都城発掘調査部　和田 一之輔）

石組溝の付け替え（北東から）

平城京の緑釉瓦

発掘調査の最中、時に土中から鮮やかな緑が顔を覗かせることがあります。そっと土を除くと、そこから緑釉のかかった瓦が姿を現すのです。

平城京で緑釉瓦が使われ始めるのは概ね天平年間以降（728～）のことで、最も多く出土するのが平城宮の東院地区です。というのも、『続日本紀』には「東院玉殿」なる建物の記述があり、そこに「瑠璃瓦」すなわち緑釉瓦を葺いていたようです。この「玉殿」そのものは現在も確認されていませんが、緑釉瓦の出土はその存在を裏付けていると言えましょう。

緑釉瓦が出土するのは平城宮内に限りません。特徴的なのは、長屋王邸宅周辺からの出土が目立つことです。長屋王邸宅そのものからは出土していませんが、その北側と東側に面した宅地から出土していることから、おそらくは有力な貴族の邸宅に用いられていたのでしょう。

その後、緑釉瓦は平安京で最盛期を迎え、その大極殿の屋根を飾るまでになります。緑の甍はそれほどまでに、古代の人々の心をつかんでいたのです。

（都城発掘調査部　林 正憲）

カンボディア・西トップ寺院の調査

奈良文化財研究所は、カンボディア・シェムリアップ地域文化財保護開発機構（APSARA）と共同して「アンコール文化遺産保護共同研究」をおこなっており、アンコール・トム（宮城）遺跡内にある西トップ寺院を継続的に調査してきました。今回は第６次調査にあたり、考古班と建築班によって今年１月下旬から２週間ほどの調査をおこないました。

西トップ寺院は上座部仏教の寺院で、中央に大きめの塔（中央祠堂）と、その脇の南北に小さめの塔が一基ずつ、さらに東側にテラスが迫り出しており、かつてはその上に瓦葺の建物があったようです。しかしこれはあくまで最終的な形態で、もともとは10世紀ごろにヒンドゥー教の寺院として、まず今より一回り小さなラテライト基壇の中央祠堂が建てられ、そのあと一部の石材を転用しながら今見る砂岩製の中央祠堂が建立され、続いてふたつの小塔が付け足され、さらに14～15世紀頃に上座部仏教が盛んになると、テラスが増築されて仏教寺院へと改築されたようです。

今回の調査では、テラスの東端から門にかけての前庭部を発掘し、テラスや周壁などの構築方法を確認しました。さらに部分的に掘り下げたところ、レンガや石材を並べた下層遺構が姿をあらわしました。とりわけレンガは、この遺跡で今見ることのできる建築にはまったく使われていない建材です。層位的には、この下層遺構はテラスや周壁が作られるより前の時期にさかのぼると考えられます。レンガは、アンコールでは11世紀頃まで主要な建材として用いられ、たとえば10世紀に建てられたプラサート・バイ寺院では見事なレンガ造りの祠堂を見ることができます。もちろん、レンガはあらゆる時代に用いられた建材のため、それだけで時期を特定することはできません。今回の調査では、下層遺構の上面だけを検出するにとどめましたが、次回以降の調査によって、その年代や性格をよりはっきりさせることができるでしょう。ただ、この遺跡が存続する何百年もの間、さまざまな増改築がおこなわれ、たびたびその姿を変えてきたことは確実なようです。

この西トップ寺院は、メインの観光ルートから離れていることもあり、訪れる人も少なく、普段はひっそりとしています。それでも調査中に、白い服に身を包んだ尼さんたちがお参りをする姿を目にすることもありました。この遺跡が、今なお信仰の場として生き続けているということに、あらためて気付かされました。　（企画調整部　石村 智）

西トップ寺院の周囲を踏査する調査団員

レンガなどが並ぶ下層遺構（北から）

バナナに線香を挿してお参り

今次中期計画の覚書調印

平成18年度から22年度までの中期計画に沿い、西トップ寺院を対象とした共同研究の覚書を新たに作成し、３月１日、プノンペンのアプサラ（シエムリアップ州文化財保護管理機構）本部にて、所長とブンナリット総裁との間で調印式がおこなわれました。

共同研究覚書調印

「ドメスティケーション・モデルの構築－博物学の視点から」奈良研究会開催

２月15、16日の２日間、総合研究大学大学院・葉山高等研究センターの特任研究員の秋篠宮殿下を代表者とする上記の研究会が奈文研小講堂と文化財資料棟とで開催されました。この研究会は文化系・理科系のさまざまな機関に所属する研究者、約30名から構成されています。

ドメスティケーションとは、家畜・家禽化のことで、野生動物が人間に飼われるようになり、現在見るように、さまざまな形で人間の役に立つ家畜になって、独特の文化を形成するにいたったモデルを構築することを目標としています。この奈文研での研究会は、日本列島における犬の起源とその文化をテーマにしたもので、家犬が１万年以上前にアジアのどこかでオオカミが飼い慣らされ、日本列島へも古い段階で連れてこられ、現生の柴犬へと移行したことを軸に議論が進みました。

その発表は、骨の形態学、古DNA分析による遺伝学、安定同位体による食性分析などの生物学的アプローチと、考古学、歴史学、社会学などからの文化的アプローチが組み合わされたものでした。特に殿下からはしばしば的を得た質問やコメントが出され、この問題に対するなみなみならない知識と熱意が感じられました。

また研究会の後、秋篠宮殿下を中心に第一次大極殿正殿の復原工事現場を視察することができ、参加者は皆、奈文研での開催に満足して解散することができたと思います。（埋蔵文化財センター　松井 章）

研究会終了後、平城宮跡資料館前にて

退職者のひとこと

定年を迎えて（やった定年だ！）

川越俊一さん

1974年の入所以来、平城地区で13年間、飛鳥藤原地区で20年間の計33年間を一貫して発掘調査研究部門で過ごせたことは、私にとっては奇跡のように思われます。入所から数年間は、先輩方と議論をし、意見が通らないと若気のいたりから、「辞めたるわ」と捨てぜりふを残していたようです。もちろん、私はそのような無礼な態度を取った記憶は全くないのですが、先日も大先輩にお会いした時に、「あんたまだ勤めとったん」と声を掛けられ、どっと冷や汗が出るのを感じました。無事にここまでこれたことは先輩をはじめ、皆様のおかげと心より感謝しています。

研究所での業務の大半は、発掘調査とその整理に費やしました。発掘調査では、参加した各遺跡それぞれに思い入れがあります。今でもその時のメンバーの表情を含めて、進行状況がイキイキと蘇ってくるようで、誰もが羨むような第一級の遺跡の発掘調査に今後直接係れないことへの寂しさを感じる今日この頃です。

この33年間、皆様の御指導と助力によって、やりたいことをやらせて頂き、言いたいことを言わせて頂きました。本当にありがとうございました。

（都城発掘調査部長　川越 俊一）

山田寺南門の調査での一コマ（1989年）

飛鳥資料館春期特別展のご紹介

「キトラ古墳壁画四神玄武」
平成19年４月20日（金）～６月24日（日）

大盛況だった昨年のキトラ古墳壁画「白虎」の特別公開に引き続き、飛鳥資料館では今年度も、関係諸機関のご協力のもと、５月11日（金）～27日（日）までの17日間の期間限定で「玄武」の特別公開を致します。また、この公開にあわせて、春期特別展では、中国における玄武の出現からキトラ古墳に至るまでの道のりを紹介致します。

玄武の出現は前漢に遡ります。王莽（おうもう）新から後漢にかけては中国各地にひろがりをみせ、南北朝になると、南朝の影響をうけつつ、北朝では、さまざまな図案の玄武が展開します。また、高句麗や百済など朝鮮半島でも、玄武を含む四神が現れます。つづく、隋唐時代では、その玄武の図案の様式化が進むこととなります。

日本の玄武は、古墳時代には断片的に伝わったとみられますが、その本格的な出現は、今回のキトラ古墳壁画の玄武を始めとします。

こうした玄武について、本特別展では、中国（漢）長安城（ちょうあんじょう）出土の瓦当、山東省東安漢里（とうあんかんり）の画像石拓本、北魏末の爾朱紹（じしゅしょう）の墓誌蓋）、高句麗・百済（古墳壁画模写や写真パネル）、日本（福岡県竹原古墳壁画模写、奈良県藤ノ木古墳出土金銅製馬具レプリカ、高松塚古墳壁画模写）を中心に展示し、玄武の源流を辿りたいと考えています。

玄武は、その発見によりキトラ古墳に壁画の存在を決定づけた、いわばキトラ古墳の象徴です。本展覧会では、こうした象徴たる玄武の神秘的な姿の謎について、ひろくご紹介したいと考えています。　（飛鳥資料館　清永 洋平）

キトラ古墳壁画 玄武

■　記　録

埋蔵文化財担当者研修

○報告書作成課程
平成19年１月10日～19日　　20名
○古代陶磁器調査課程
平成19年２月１日～９日　　12名
○環境考古学（生物編）課程
平成19年２月21日～28日　　15名

現地見学会

○飛鳥藤原第146次（甘樫丘東麓遺跡）
平成19年２月11日（日）　　5,015名

平城宮跡資料館展示

○パネル展「日中共同　唐長安城大明宮太液池（だいめいきゅうたいえきち）の発掘調査」
平成18年５月27日～12月27日
○奈良の都を掘る　発掘成果展　－平城2006－
平成18年10月31日～12月27日
○速報展「西大寺食堂の井戸」
平成18年11月21日～継続中

飛鳥資料館冬期企画展

○「発掘調査速報展－飛鳥の考古学2006」
平成19年１月16日～２月25日
○特別講演会
平成19年２月３日（土）
「飛鳥の考古学2006－発掘された蘇我氏の飛鳥－」
明日香村教育委員会　相原 嘉之氏

研究集会・研究会

○古代官衙・集落研究会
平成18年12月15日～16日
○遺跡整備・活用研究集会
平成19年１月25日～26日

■　お知らせ

飛鳥資料館春期特別展

○「キトラ古墳壁画四神玄武」
平成19年４月20日（金）～６月24日（日）
臨時休館　５月10日（木）

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp
E メール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2007 年３月